



2019 KOMATSU-ALL JAPAN TETSUJIN RACE 38th

[北陸中日新聞] 朝刊掲載記事 電子ブック



2大会連携を記念したロゴマーク案

合体発信・鉄人2レース

能登島・小松 共通証明書、記念ロゴ

石川県七尾市で初夏に開く「のどまトライアスロン大会」と同県小松市で秋に行う「KOMATSU全日本鉄人レース」（いずれも北陸中日新聞共催）の両実行委は、今年から協力を深める。二つの大会を同時に盛り上げ、石川の魅力を全国に発信する。両実行委が五日、小松市の鉄人レース事務局で共同発表した。

両レースとも日本トライアスロン連合の公認大会。のどまは六月三十日、鉄人レースは九月二十九日に開く。今季から両大会完走者に共通の完走証明書を渡す。公認レースで共通証明書を発行するのは初めて。能登島ガラス工房のグラスと小松産トマトを使ったレ

トルトカラーセットも一緒に贈り、地域らしさを添える。リレーは対象外。のどままで県内一位の男女は鉄人レースに無料招待する。記念ロゴマーク案も発表した。両大会のロゴを並べ「心を一つに」を意味する英語「HEART, FOR ONE」と記した。ステッカーなどに使う。

のどまには前回大会の第二回は全国から三百五人、三十七回目の鉄人レースには六百九十九人がエントリーした。

鉄人レースの上野谷龍治競技本部長は「石川全体で盛り上げ、多くの選手を呼びたい」、のどまの多田健太郎実行委員長は「地域の魅力を発信できるスポーツが根付けば」と期待した。

のどまは五月七日まで参加受付中。鉄人レースの申し込みは五月から。問い合わせは、のどま＝電話0767(53)2100、鉄人レース＝電話0761(22)1923へ。（竹内なき）



協力する両大会の実行委メンバー。石川県小松市大馬町で（竹内なき撮影）



ロゴマーク案

小松市内で秋に行う「KOMATSU全日本鉄人レース」

KOMATSU全日本鉄人レース 実行委員長ら本社で抱負



本社を訪れた寺田喜代嗣委員長と上田克助参与＝金沢市の中日新聞北陸本社で

「のとじま」と相乗効果で盛り上げ

「レース」（北陸中日新聞共催）の寺田喜代嗣実行委員長と上田克助参与が十三日、金沢市の中日新聞北陸本社に菅沼堅吾代表を訪ねた。

鉄人レースと、七尾市で六月末に開く「のとじまトライアスロン大会」（同）の両実行委は六日、今年から協力して両大会を盛り上げると合意した。両レース

は日本トライアスロン連合の公認大会。のとじまは六月三十日、鉄人は九月二十九日にある。

寺田委員長は、合意内容を伝えた上で「二つの大会の連携による相乗効果で両大会を盛り上げていきたい」と抱負を述べた。菅沼代表は「非常にいい取り組み。大いに賛成する。全国から多くの参加者に来てもらえば、県全体にとってプラスになる」と協力を約束した。

3月14日 北陸中日新聞より



鉄人レース運営 「勉強になった」

小松の実行委3人出場

リレーには能登島大会の視察を兼ね連携する鉄人レース実行委員会の長池正さん（スイム）、佐野弘明さん（バイク）、上野谷龍治さん（ラン）が出場した。二十二位に終わったが、上野谷さんは「大雨で難しい」と話した。（室木泰彦）

初連携した大会の視察を兼ねてリレーに出場した（左から）佐野弘明さん、上野谷龍治さん、長池正さん

い判断だと思いが、道路冠水を見ればバイク中止は正解。縮小し大会を行ったのも正解。非常に勉強になった」と話した。

最初のスイムで四位と健闘した長池さんは「海のコンディションが良かったが、雨の影響で濁っていて大変だった」。バイクの佐野さんは入念に準備していただけに拍子抜けは否めなかったが、「かえって冷静に大会運営状況を視察できた」と振り返った。

秋の鉄人レースには、能登島の実行委メンバーが視察を兼ね出場予定。上野谷さんは「互いに良い部分を学び合い競技を盛り上げた」と話した。（室木泰彦）

7月1日 北陸中日新聞より



第38回
全日本鉄人レース
KOMATSU
2019-9-29
限界に挑む

申し込み締め切り迫る 19日まで

小松市で九月二十九日にあるKOMATSU全日本鉄人レース（北陸中日新聞共催）の申し込み締め切りが十九日に迫っている。

大会はバイク（自転車）と走り競うデュアスロン競技。登山もある。日本トライアスロン連合公認大会では、二番目に古い。参加賞のTシャツはデザインを一新。繊維加工大手の小松マテリアル（能美市）製の高性能素材を使う。

レースは鉄人の部、バイク60キロ、登山10キロ、20キロ

昨年のレースで一斉にスタートする選手たち。小松市で

走、ロングの部は6キロ、バイク60キロ、20キロ走、ショート

の部は6キロ走、バイク60キロ、6キロ走。三人一組でロングの部のコースを走る

チームリレーの部がある。定員は鉄人とロングが各二百人、ショートが二百五十人、チームリレーが三十組。各部ともまだ若干の空きがある。

申し込みは、インターネットの公式ホームページ（全日本鉄人レースで検索）で受け付けている。申込書をダウンロードし、郵送も可で、十九日の当日消印有効。寺田喜代嗣実行委員長は「多くのエントリーを期待しています」と話す。問い合わせは実行事務局。電話0761(22)1923へ。

走、ロングの部は6キロ、バイク60キロ、20キロ走、ショート



交通規制看板を取り付ける実行委メンバー＝小松市林町で

第38回
全日本鉄人レース
KOMATSU
2019-9-29
限界に挑む

交通規制の看板を設置

小松市で二十九日に開催が迫るKOMATSU全日本鉄人レース（北陸中日新聞共催）の交通規制看板の設置が十四日、市内のコース沿道であった。看板は二十枚。市こまつ

沿道準備走りだす

ドーム周辺では大会当日の午前七時二十分から午前九時まで通行止め、他のコース沿道でも午後零時半まで交通規制がある。

実行委メンバーやボランティアらが集まり、電柱などに看板をひもでくくりつけた。大会開催を告知する横断幕も、沿道のガードレールなどに取り付けた。（長屋文太）

選手への給水法など確認



ガンバロー三唱で拳を突き上げるボランティアスタッフら。小松市のこまつドームで

KOMATSU全日本鉄人レースのエイドステーション（AS）の打ち合わせが十三日夜、市こまつドームであった。開催実行委、航空自衛隊小松基地隊員や各町内のボランティアスタッフら三十六人が参加した。

大会当日、ASはコース沿い十六カ所に設けられる。打ち合わせでは、各ASを担当する各町内会など

に応援用グッズが配られ、スポーツドリンクや果物などレース中の選手への提供法などを確認した。

寺田喜代嗣実行委員長は「ASは日本一の大会。みなさんの協力をお願いします」と支援を求めた。最後に上野谷龍治競技本部長の発声でガンバロー三唱し、大会成功に心を一つにした。

（坂麻有）

第38回
全日本鉄人レース
KOMATSU
2019-9-29

限
界に
挑む

29日の本番へ準備着々
実行委 Tシャツなど袋詰め



小松市内で二十九日に開かれるKOMATSU全日本鉄人レース（北陸中日新聞共催）の参加賞となるTシャツなどの袋詰めが二十日、同市大島町の実行委員

会事務局であった。Tシャツは、今年から化学素材メーカー「小松マテール」（能美市）が製作。トウモロコシ由来の環境に配慮した糸「クールドット」を使った生地を加工しており、優れたストレッチ性や吸水性、速乾性を備えている。紺地で、胸にはバイクで走る選手をイメージした大会ロゴが描かれている。この日はスタッフ十人が袋に名前シールを貼り、Tシャツなどを手際よく袋詰めした。六百八十八人の出場選手には、レース前日の

事務局で進めるスタッフ＝小松市大島町で

第38回KOMATSU鉄人レース (26)

質問させていただきます。

前日に説明会が開催されますがその時はバイクは必要でしたか？車検？てありましたか？すみません🙏🙏🙏教えてください🙏🙏🙏

15:01

バイクが追加しました。

レース実行委員会

raphael(@@)

質問させていただきます。

バイクの車検は特に実施しておりませんのでご自身で違反のないように整備、チェックを行ってください。

28日開会セレモニー前後にメカニックサービスなどもあり、バイクは前日からドーム内に保管ができます。

また当日に持ち込み、ゼッケンなど準備頂いてもかまいません。

17:05

選手からの質問を随時受け付けているオープンチャットのトークルームの画像

市内各地に設置され、大会を盛り上げるのぼり旗＝小松市三谷町で

第38回
全日本鉄人レース
KOMATSU
2019-9-29

限
界に
挑む

小松市内で二十九日に開かれる「KOMATSU全日本鉄人レース」（北陸中日新聞共催）実行委事務局は、無料通信アプリ「LINE（ライン）」の新機能「オープンチャット」を始めた。登録すると、レースの疑問点などを事務局に気軽に問い合わせたり、選手同士が交流できたりする。

ライオン登録者なら誰でも参加でき、匿名の登録も可能。鉄人レース専用のトークルーム上でのみやりとりができる。事務局が用意したQRコード＝写真＝を読み取ると、登録画面に移る。二回目以降、ラインのトーク履歴などからトークルームにアクセスできる。選手やボランティア、観戦者などの利用を想定している。事務局はレースに関する情報や動画、写真を配信し、寄せられた質問に返

チャットで交流 気軽に

LINE、期間限定開設

答する。レース当日は順位速報も載せる。

事務局以外の書き込みも歓迎している。担当者は「レースへの意気込み、当日の選手の通過情報などたくさん投稿して大会を盛り上げてほしい」と話している。大会前後の期間限定で、十月末をめどに閉鎖する。

一方、二十四日には、レース実行委八人が大会ののぼり旗三百本を市内各地に設置した。電柱やガードレールなどにひもでくくりつけた。ピンクや黄色地の旗には大会名や「難関突破」などとスローガンが書かれ、本番に向けて雰囲気盛り上げている。

（長屋文太）

事前説明会でゼッケンやIDカードと一緒に渡す。寺田喜代嗣実行委員長は「いよいよ本番が近いなという気持ち。選手は無理せずに体調を整え、万全の状態で出場してほしい」と話していた。

（青山直樹）

ピンクリボン 闘う印

熱き選手たち①

黒地に、ひらりと舞い落ちてきたかのようなピンクの平たいひも。その上に赤に近いピンクの文字「Pink Ribbon」が胸いっぱい躍るデザインが目立つシャツ。

女性のがんで一番多い乳がん。ピンクリボンは、その早期発見、治療の大切さを伝えるシンボルになっている。

「このシャツを着ると、何か背負っている気持ちになる。苦しくても、もう少し頑張ろうと思える」。県立中央病院に勤める医師、吉野裕司さん（50）＝金沢市＝は、優しい笑みをたたえつつ、きっぱりと言い切る。

四十歳すぎから健康のため、マラソンを始めた。学生時代にボート部だったこともあり、体力はすぐ戻った。早朝や仕事が終わってから練習した。間もなく、フルマラソン

は3時間2分で走れるようになった。市民ランナーでは相当速い。

患者の女性から贈られたピンクリボンのシャツを着て、乳がん撲滅を願い、走る吉野裕司さん＝金沢市御所町で



乳がん専門医 吉野裕司さん(50)＝金沢市

トレニングの一環で、競技用自転車にも乗り始めた。故郷、小松市で開かれている鉄人レースを知り、三年前、初めてロングの部に申し込んだ。レース中、水分や食べ物

の補給所を通るたび、ボランティアから声援が飛んできた。「吉野さん！頑張ってる！」。名前を呼び、応援してもらえる温かい雰囲気が入った。「元気が出る大会。デュアスロン大会は珍しいし毎年出よう」と決めた。

食生活の欧米化などで年々、患者が増えているとされ「困難に立ち向かってほしい」とシャツをデザインしたという。

KOMATSU全日本鉄人レース 自転車と登山、競走を組み合わせたデュアスロン大会。小松市の活性化とまちづくりを目的に、1982年10月に始まった。今年で38回目を迎える。鉄人（自転車40キロ、登山10キロ、自転車20キロ、20キロ走）とロング（6キロ走、自転車60キロ、20キロ走）、シヨート（6キロ走、自転車60キロ、6キロ走）のほか、ロングのコースを3人で分担するチームリレーがある。

十月はピンクリボン月間。少しでもピンクリボン活動の啓発につながればとの思いも抱き、毎年九月末の鉄人レースに参加する。今年もロングの部に出る。目標は総合十位以内、年代別で三位以内だ。くだんの女性は現在、治療が一段落し健康のため、マラソンを走り始めるほど元気になった。でもシャツに託してくれた思いは変わっていないはず。「ピンクリボンのシャツを見かけたら、ぜひ応援して」。そう話す吉野さんは「楽しく完走して順位を上げたい」と付け加えた。

熱き選手たち③

競技用自転車で山道を登る
タイムを競う「ヒルクライム」。

勝する」。二十代からトライアスロンに出場してきたありこのママ西出かをるさん(五十一)、常連客の航空自衛隊小松基地小松救難隊の大留信哲(三十三)と、悲願達成を誓う。

古屋市中村区の自転車店経営
第五郎さん(四十四)は、今年も小松市龍助町のスナック「ありこ」チームで、六十キロ走のバイクを担う。チームは昨年、十八秒差で二位に甘んじた。「絶対トップで帰ってきて優

勉められ、ロードレースに挑戦してきた。長野県松本市などを拠点に二十八歳まで十年間、実業団登録していた。目立った成績が残せず、一度は



悲願のチームリレー初優勝を狙う第五郎さんと西出かをるさん。小松市林町で

チームで悲願のVへ

自転車「登りの神」 第五郎さん(44)＝名古屋市
女子ロングで優勝 西出かをるさん(51)＝小松市
雪辱を期す自衛官 大留 信哲さん(33)＝小松市



最終走者として優勝を目指す大留信哲さん。加賀市内で(本人提供)

勝、鉄人の部女子三位などの

「全日本マウンテンサイクリング」でも優勝する

「全日本マウンテンサイクリング」でも優勝する

最終走者として優勝を目指す大留信哲さん。加賀市内で(本人提供)

勝、鉄人の部女子三位などの

「全日本マウンテンサイクリング」でも優勝する

「全日本マウンテンサイクリング」でも優勝する

9月27日 北陸中日新聞より

パンフレットと景品のポロシヤッをPRする大会実行委のメンバー。小松市大島町で



鉄人レース パンフ完成

コースや選手紹介
あす開会式で配布

小松市で二十九日に開かれる「KOMATSU全日本鉄人レース」(北陸中日新聞共催)のパンフレットが完成した。コースや出場者紹介、昨年のレースで募集したフォトコンテストの入賞作品などが掲載されている。出場者の熱いメッセ

ージもある。選手には二十八日の開会セレモニーで配布する。

A4判で四十一頁。表紙は、市内で撮影された爽やかな青空の写真に昨年の大会のゴール場面の写真を六枚張り付けてある。家族で手をつなぐなどしてゴールした選手の歓喜している姿が目立つ。フォトコンテスト入賞作品は十一点。タオルやうちわを持って笑顔で応援する人たちが、苦しそうな顔で上り坂を走る選手らを捉えている。

大会事務局は、今年もレース中の写真を募集している。新しい試みとして、今年からリニューアルされた小松マテール(能美市)製の大会Tシャツの着こなしを競う写真コンテストも開く。上位者には、大会名がピンクの刺しゅうで入った灰色のポロシャツが贈られる。写真の応募はレースのホームページで受け付ける。(長屋文太)

熱き選手たち①

四男一女の五人の子宝に恵まれた金沢市山科、薬剤師黒沢奈々子さん(47)は子育てが少し一段落した四年前、ランニングを始めた。翌年、金沢マラソンに初めて出場し、昨年まで毎年完走。タイムも縮めた。今回鉄人レース初挑戦で最も過酷な鉄人の部に挑む。「限界に挑みたい。働きのながら子育てする、全ての母親の背中を押したい」

「山を下りると、出産後みたいになって、一歩も動けな

働く母にエールの汗

なかった。涙が出てきた」。

働く母親の背中を押す走りを誓う
黒沢奈々子さん＝金沢市米泉町で



薬剤師 黒沢奈々子さん(47)＝金沢市

家族からの助けや病児保育も利用したが欠勤、早退したことも。「生活の中心は子ども。食事とか、トイレなんて待ってられない。寝かしつけてから家事をして睡眠は三時間の日もあったと振り返る。自宅前が金沢マラソンのコースで四年前、選手を応援した。「走った方が楽しそう」と感じた。十二月、地元のランニングクラブに入った。最初は十分間ほどゆっくり走るのが限界。三キロも走れない。でも、つらくなかった。子どもの歩幅に合わせて歩くのが当たり前だった日々。「自分の歩幅とペースで前に進んでいいんだ」と思った。自転車に乗る子どもと近所の公園を歩いたり、走ったりを繰り返した。半年ほどで楽に走れるようになった。

翌年金沢マラソンに出てみた。六時間半でゴール。体の節々が痛かったが「やればできる」と達成感に満ちた。でも涙が出るほどではなく、「五人の子育てより楽かも」。昨年の大会では三時間

五十分で走った。トライアスロンを楽しむクラブ仲間が誘われ、七尾市で六月にある「のどけなトライアスロン大会」をデビュー戦に位置付けた。あいにく大会前日の大雨でコースが変更になり、自転車走は中止に。物足りなさを感じたレース直後、鉄人レース実行委に声を掛けられ、鉄人レースを知った。

「実はちょっと怖い」。コース試走で、鉄人の部出場は無謀な挑戦かもと頭をよぎる。それでも「完走できなかつたら、何度でもチャレンジしたい」と前を向く。家事は子どもたちが手伝ってくれるようになった。何より、走り始めてからストレスが減り、体調が良くなった。

「やりたいことをやって笑顔で家に帰れば、気持ち切り替えられる。輝いている太陽みたいな、いつも笑顔の母親の背中を見たい」。朗らかな笑顔が最後に引き締まった。

本番へ 準備着々 公立小松大生ら会場設営

小松市内で二十九日に開かれるKOMATSU全日本鉄人レース(北陸中日新聞共催)の会場設営が二十七日、発着点となる市こまつドームで始まった。実行

委や市消防本部、航空自衛隊小松基地の隊員のほか、公立小松大の学生ら計二十五人が協力。本番に向けた準備を整えた。

午前九時ごろから作業を



会場の設営を進めるスタッフたち＝小松市こまつドームで

始め、競技自転車の置き場となるバイクラックのほか、「おかえりなさい」と書かれたゴールゲートなどを手際よく設置した。「難関突破」の文字や、市のイメージキャラクター「カブツキー」が描かれた垂れ幕三枚も設けた。

大会には二十五都道府県から六百八十八人がエントリー。二十八日には、選手登録と開会セレモニーなどがある。寺田喜代嗣実行委員長は「当日は小雨の予報で、走りやすいと思う。選手には楽しんでもらえたら」と話している。

(青山直樹)

大会写真 ふんだんに

○…本紙は鉄人レースの完走者新聞を今年初めて発行する。申し

第38回大会 KOMATSU 全日本鉄人レース 2019

難攻不落のコース攻略おめでとう！

中日太郎さん鉄人だ

No. 12345

(記録) 1:23:33

(鉄人の部) 155位



体力の限界に挑んだ

本紙が発行する完走者新聞のサンプル

完走者新聞 本紙が発行

込むと、レースに参加した自分の写真をメインにした世界で唯一の新聞を後日、受け取れる。

新聞はブランケット判2頁。表面は完走した自分の写真、名前、記録、順位が載る。写真は、レース中ではなく、ゴール後の姿。裏面は、レースや大会会場の雰囲気分かる写真がふんだんに載る。

10月下旬、鉄人レースの結果などを伝えるレース翌日発行の本紙とセットで届ける。石川、富山県内は本紙販売店が届け、両県以外は郵送する。税込み700円。レース前までこまつドーム内の特設ブースで受け付けている。

熱き走り準備万端

第38回
全日本鉄人レース
KOMATSU
2019-9-29



熱く意気込みを語る招待選手=いずれも小松市こまつドームで

小松で開会セレモニー

招待選手 意気込み

○…昨年の前回大会で部門優勝した選手や、六月に七尾市であった「のどしまトライアスロン大会」(本紙共催)で県勢一位の招待選手が意気込みを語った。

昨年、鉄人の部男子で初優勝した小松市職員若林貴規さん(四四)同市西軽海町は「令和になって最初の鉄人レース。笑顔でゴールできるような頑張りましょう」と出場選手に呼び掛けた。

第二回大会優勝者で、昨年まで三十六回連続で完走した愛知県岡崎市の鍼灸師山本久夫さん(五〇)は、十八年ぶりに鉄人の部に出場する。近年は、ショートの部に出場していた。山本さんは「昔は鉄人、今は別人。今年、完走してまた鉄人に

公立小松大生 運営に初参加



ボランティアを代表し宣誓する
松浦清さん(左)と東出真奈美さん

○…大会にはボランティア約九百人も参加し、運営を陰で支えている。今大会から公立小松大の学生二人が初めて加わり、会場設営のほか、レース当日は本部運営などに協力する。

二人はいずれも生産システム科学部二年で、いずれも富山県出身の松浦清さん(二〇)と金田和磨さん(二〇)。松浦さんは「小松市の一員として、レースの雰囲気を感じてみたかった」と参加。金田さんは「学外の人と接し、とてもいい経験に

高齢選手「ガンバロー」



レース完走を誓う三林松一さん(中)、丹波良一さん(左)、山本久夫さん(右)

○…今大会の最高齢選手で、ショートの部に出る三林松一さん(八三)金沢市は「ガンバロー」の掛け声で、三林さんは「免許を返納しなきゃいけないのに。何とか完走したい」と笑いを誘いつつ話した。次に高齢の丹波良一さん(八〇)は「同じく同部に出る。丹波さんは「ちよつとも頑張り、若い皆さんに付いていきたい」と語った。

完走願ひ込め 園児が和太鼓



○…小松市井口町の粟津温泉こども園の年長児十人が、選手が完走できるように願ひを込めて、和太鼓を披露した。園児が代々、受け継いでいる「月響」「大地」の二曲を力強いばかりさばきで演奏した。園児は演奏を終え、最後に全員で声を合わせて「選手の皆さん、力いっぱい頑張ってください」と激励した。

力強い演奏で選手を鼓舞する
粟津温泉こども園の園児ら

なれるよう頑張りたい」と笑顔で意気込んでいた。

のどしま大会で県勢一位の小松市の三田村達也さん(四八)と加賀市の直下典子さん(四八)はそれぞれ「のどしま大会で県勢一位の思い切り走りたい」「何年かぶりの鉄人レースを頑張りたい」と話した。

初回含め5度優勝 能美の西田さん

65歳鉄人伝説第2章

石川県小松市で二十九日にある「KOMATSU全日本鉄人レース」(北陸中日新聞共催)に三十八回目を迎える大会のレジエントが帰ってくる。第一回大会をはじめ、過去七回出場し、三部門で五度優勝した石川県能美市山口町、西田芳さん(ふみだ)。大会から離れた五年前、六十歳で出場を期したが、故障で断念。満を持して出場する。「やるからには六十五歳以上で一位を目指す」(長屋文太)

23年ぶり個人戦「頂点狙う」

鉄人レースの個人戦に23年ぶりに出場する第1回覇者の西田芳さん＝石川県小松市の木場瀬公園で



「二日後に大会がある。地元選手が少ない。出てくれないか」。一九八一年十月の第一回大会を前にした知人の電話だった。島根県体の自転車競技に出て帰宅した晩。「えっ? 行くだけ、行くわ」

会場では、ママチャリで走らうとする選手もいた。「バイクでは絶対負けん」。再び自転車にまたがると

「疲れが吹っ飛び、ビュンと行けた」。長距離走も一位のまま、大差で優勝を飾った。

その後、会社勤めの傍ら、三十二歳まで自転車競技に力を注いだ。四十歳ごろから、自転車と長距離走で競うデュアスロンを始めた。折しも登山のない「デュアスロンの部」が鉄人レースに新設され、力試しに九六年の十五回大会に出た。自転車では独走、長距離走も踏ん張って優勝した。「四十代で、二十代の選手に勝て、うれしかった」

それからチームリレーの部で自転車を担当。二〇〇三、〇四、〇八年大会で優勝した。でも「チームはお祭り。やはり個人が花形」。もの足りなかった。六十歳で定年を迎えたのを機に、六十歳の自転車走を挟み、

「KOMATSU全日本鉄人レース」の開会式が二十八日、発着点の石川県小松市こまつドームであった。今年は二十五道府県、六百八十八人がエントリーし、約九百人のボランティアが運営を支える。

式では寺田喜代嗣実行委員長が開会を宣言。竹村信一副市長、前田昌彦中日新聞北陸本社代表が選手を激励した。

招待選手八人は「仲間と励まし合って完走したい」「四連覇を目指す」と意気

それぞれの挑戦 健闘を

こまつドームで開会式



ガンバロー三唱で健闘を誓う選手たち＝28日、石川県小松市こまつドームで

六歳の長距離を二度走るシヨートの部を目指し、練習を始めた。だが、出場しよ

うとするたびに故障。出場を先延ばしした。

今年三月、六十五歳に。再雇用を含め、会社勤めが終わった。「いわば二回目の定年。今年こそ節目」。

六度目の優勝を目指す中、決して楽ではない練習をこなす理由は明快だ。「目標があるから頑張れる」

鈴木 日本競歩初の「金」

男子50キロ、五輪切符



陸上世界選手権の男子50キロ競歩で優勝し、カッパースする鈴木雄介。29日午前3時34分、ドーハで(写真:直紀撮影)

世界陸上

【ドーハ＝森正範】陸上の世界選手権男子50キロ競歩は、十八日から十九日にかけて、当地で行われ、鈴木雄介(三)・富士通、石川県能美市出身が、4時間4分20秒で優勝し、東京五輪代表に決まった。今大会の日本勢でメダル第一号、競歩では五輪、世界選手権を通じて初めての金メダル獲得となった。母のお守りと歩み五輪切符、関連⑥⑦

の世界記録を持つ鈴木は気温三度、湿度74%(スタート時の過酷なレースでも力を発揮し、東京五輪でも有力な金メダル候補として室伏広治以来五人目)の室伏広治以来五人目

どん底経験糧に

ついに四十五歳付近で歩を離れ、立ち止まった残り五。鈴木は必死にたつてゴールへたどり着いた。すべて、あの二年九カ月の苦い生活が頭をよぎる。感極まった今回の50キロ競歩と同じ、決して平たんな道のりはなかった。これまで来るのに三年

近々競技がでる時期があった。自暴自棄もなつた。全ての人のためにおかげで帰ってこれた。二〇一五年三月、20歳で

雨のち晴れの激走

市民アスリートが自転車や長距離走などで競つ、第三十八回KOMATSU全日本鉄人レース(北陸中日新聞共催)が二十九日、石川県小松市のこまつドームを発着点に行われた。鉄人の部男子は伊藤朋(さん)・滋賀県高島市、女子は高森恵美子(さん)・富山市が共に初優勝した。日本トライアスロン連合公認大会で二番目に古い。鉄人バイク40歳・登山10歳・バイク20歳・ラン20歳、ロング(ラン6歳・バイク6歳・ラン20歳)、ショート(ラン6歳・バイク6歳・ラン6歳)とロングを三入一組で走つた。エントリした六百八十八人中、二十三都道府県の六百三十八人が出走し、五百九十七人が完走した。午前中に一時、土砂降りの雨に

滋賀の伊藤さん 初V

見舞われたが、最前には一転晴れた。九百人のボランティアがドームや沿道で選手を支えた。今年、石川県七尾市のとじまつトライアスロン大会(同共催)と初めて連携。六十七人が両レースともゴールし、共通の完走証を受け取った。



ゴールを目指し、勢いよくスタートする鉄人の部の選手たち=29日朝、石川県小松市で(篠原麻希撮影)

ボランティア900人



走り終えたばかりの選手にナシを配るボランティアの女性自衛官＝小松市こまつドームで

女性自衛官 ナシ配る
 ○…こまつドーム内中央のゴールでは、航空自衛隊小松基地の女性自衛官五人が、走り終えたばかりの選手らに「おめでとうございます」などと声をかけながら、ナシを配った。
 ナシは加賀市産の二百七十個を用意。朝からドームで女性隊員たちが包丁で一つ一つ、皮をむいた。汗だくでゴールした選手や家族らがナシを次々と食べ、「おいしい」と喜んでた。
 小林真美さん(26)は「お疲れさまという気持ちで渡した。ちょっと果物があると、疲れが取れるのかな」と話した。

多くの地域住民に支えられている鉄人レースの良さに引かれ、昨年に続き、二回目の参加。グループ小まめコーディネーターの斎藤和美さん(48)は「すてきな大会にこれからも携わらせていただきたい」と話していた。

明るくアナウンス グループ小まめ



選手のゴールに備え、プログラムやゼッケン番号などを確認する小まめのメンバー＝小松市こまつドームで

柔道整復師 体ほぐす
 ○…こまつドームでは、県柔道整復師会の三千七人が施術用ベッドを用意。レース前は選手の体をほぐし、レース後はストレッチで痛みを和らげるなど延べ約三百五十人にスポーツトレーナーサービスをした。金沢大トレーナー部員十七人も受付などで手伝った。
 理事で加賀支部長の中村茂之さん(50)は「ふくらはぎなど膝下に負担がかかるマラソンと違い、鉄人は股関節や背中、腰などに痛みを訴える選手が多く、過酷さが分かる」と話した。



柔道整復師から体のケアを入念に受ける選手＝小松市こまつドームで

大会盛り上げ一役



小松市で29日にあった「KOMATSU全日本鉄人レース」(北陸中日新聞共催)では、約900人のボランティアが会場のこまつドームで演奏や場内アナウンスなどを担った。沿道では、地元町内会や企業ボランティアらが、各地で道案内する一方、エードステーション(AS)で飲み物、果物を提供し、声援を送って選手を支え、大会を盛り上げた。(長屋文太、坂麻有、浅野宮宏)

沿道に励まされ



太鼓をたたいて応援する子ども＝小松市蓮代寺町で



選手に笑顔でブドウを渡す子どもたち＝小松市本江町で

○…蓮代寺町のASでは、地元の親子連れら15人が応援。大太鼓をたたいて選手たちを鼓舞した。

選手が走ってくると、代わる代わるバチを持って、ドン、ドン、ドコ、ドンと速いテンポで太鼓を打ち鳴らし、

蓮代寺 親子ら大太鼓

エールを送った。女性や子どもたちも通り過ぎる選手に旗を振っていた。

太鼓をたたいた蓮代寺小学校1年の鈴木蒼真君(7)は「応援するのが面白かった。走ってるのがすごかった」と話した。

癒やし

AS

鼓舞

本江 ブドウなど振る舞い
 ○…本江町のASでは、約二十人が沿道で選手を待ち受け、ブドウ、バナナ、梅干しや塩あめなどをふるまった。選手たちはみずみずしく甘い果実を口に含み、英気を養った。ブドウは同ASの目玉品として七房用意された。子どもたちが渡すと、選手は笑顔で頬おぼっていた。女性たちは色とりどりのポンポンを振って、選手を元気づけた。本江公民館の林卓真館長(48)は「選手の皆さんが、ありがとうと言ってくれたので、やって良かった。来年も頑張りたい」と話した。



③大型バイクで選手の先導に出發する加賀ハーレークラブのメンバー。④大勢の見送りを受け、スタートする選手＝いずれも小松市のごまつドーム前で



応援の波やさしく

ア約九百人。レースでは先導や順路の指示、沿道では小旗を振って選手を支えた。コースの十一カ所に設けられたエイドステーションでは、メロンやバナナ、スポーツドリンクやそうめんなどを提供した。発着点の市ごまつドームでは中学生が吹奏楽を演奏し、ゴール前で疲弊した選手を慰めた。大勢の市民が支え、参加した小松の初秋の風物詩の大会を写真グラフィックで振り返る。

二十九日に小松市であった「KOMATSU全日本鉄人レース」(北陸中日新聞共催)は、市民でつくる実行委が運営した。大会を支えたのは、地元町内会や企業、大学生らのボランティア

ボランティア、実行委会場周辺の後片付け KOMATSU全日本鉄人レースの後片付けは三日あった。実行委やボランティア約十人の日、主会場の小松市ごまつドームや競技コースになったドーム周辺の道から、レースの余韻を残す看板のぼり旗約四百本を回収、来年の開催へ向け、小松市林の倉庫で半日かけ整頓した。

片付けをしたボランティアの中には前日に出場した選手たちも。ロングの部五位の同市西経海町、睦地宏紀さん(四)は筋肉痛にもかかわらず参加した。「良い大会でした。



後片付けをするボランティアたち。小松市林町で



走り抜いた達成感 格別

今年も全国からたくましい老若男女が集った鉄人レース。小松支部の記者3人は、昨年に続いて「チームリレーの部」に出場。日ごろの運動不足がたたたり、3人とも思い描いたレース展開とは違ったとはいえ、走破できた達成感は格別。沿道の声援の温かさを選手として実感できた。



スタート直後から力が入らない。「順位より楽しんで」。事前取材で選手から聞いた言葉が思い出した。ちょっと気が楽になった。知り合いに抜かれた時、ほんのりと背中をたたかれ、力が湧いた。

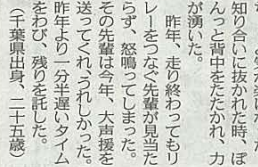
昨年、走り終わってより、その先輩が見当たらず、怒鳴ってしまったり。今年もレース後に取材をした。先輩は今年、大勢援をたぐって走り抜けた。三週間前に聞いた風邪が治らない。練習不足。

「頑張れ、うれしく」 「第2ラン、20走、青山直樹」

長屋記者に懇談され、三十年代半の体で打って走った。大学までサッカー部、それが中心に頑張った。それが、わが社「二」だ。右太ももが痛みだした。日差しが強く、早々に心が折れた。青山直樹は今年、大勢援をたぐって走り抜けた。三週間前に聞いた風邪が治らない。練習不足。

世界Vと五輪の内定 鈴木選手祝う懸垂幕

陸上の世界選手権男子5000メートルで優勝し、東京五輪代表に選ばれた鈴木雄介選手(三)を祝う懸垂幕が七日、母校の小松高校に掲げられた。



陸上の世界選手権男子5000メートルで優勝し、東京五輪代表に選ばれた鈴木雄介選手(三)を祝う懸垂幕が七日、母校の小松高校に掲げられた。

陸上の世界選手権男子5000メートルで優勝し、東京五輪代表に選ばれた鈴木雄介選手(三)を祝う懸垂幕が七日、母校の小松高校に掲げられた。

元陸上部の同級生 「五輪もぜひ金を」

「同級生一丸となって応援したい」。小松市で9月末にあったKOMATSU全日本鉄人レースの部6位の会社員坂東健生さん(31)＝能美市寺井町、写真＝は、鈴木雄介選手とは小松高校の同級生で、同じ陸上部。中距離で、当時から競歩の鈴木選手と種目は違ったが、レースと同じ日に東京五輪出場を決めた同級生の快挙を「世界陸上の金メダルはうれしい。ぜひ東京五輪でも金を取って」とわがことのように喜んだ。

